ISSN 1344-5715

Bulletin of Tokyo Kasei Gakuin University Library

東京家政学院大学 図書館報

平成18年3月5日 第52号

発行者 東京家政学院
大学附属図書館
〒194-0292 東京都
町田市相原町2600
電 話 042(782)9815
印刷所 (株)高尾印刷

図書館長に就任して

伊東 蘆一

私は、平成十七年四月一日付で図書館長に任命された。最初の仕事は、新入生に対する図書館のガイダンスで挨拶をすることであった。そのとき私は、「図書館は、勉学に当たって権威におもねることなく真実を追求することをめざすという大学教育の理念を実現するための、最も重要な拠点である」と新入生に訴えた。

私は、新入生に対してのみならず、常日ごろ、授業のときに学生諸君に対して、「ここは大学であって、これまで諸君が学んできた高校や予備校とは違う」と強調している。どう違うかということについては、「大学は主体性を持って学ぶところであり、学ぶにあたって、教える立場にあるものの話をうのみにしてはいけない。書物に書いてあることを信じてはいけない」と言っている。言いかえれば、学ぶにあたって権威に従順になるなということである。

たとえば、私が担当している実験の授業では、DNAやタンパク質を、生物材料から取り出すことを体験してもらっている。その実験に取りかかる前に、「DNAを取り出してみようなどと私はもっともらしいことを言っているが、取り出したものが本当にDNAであるという証拠をつかむまでは私の言っている事を絶対に信じてはいけない」と学生諸君に話す。初歩的な実験の授業であるから、取り出したDNAと称するものの性質をあれこれと調べる操作をおこない、その結果を教科書の記述と照らし合わせて、学生は私の言ったことがうそではなかったと納得してくれるわけである。しかし、教科書に書いてあることは本当だと言う証拠はあるのだろうか。私はそこまで学生に疑いをもってほしい。

より高度な専門科目の授業になると証拠の問題はきわめて切実である。本学では専門科目の授業や卒業研究で、食品と健康についてのテーマが取り上げられることがある。これに関連して、先日、ある卒業生が、ある食品成分が健康に対して好ましくないという新聞記事を目にしたといって私を訪ねて来た。その卒業生は、私に「新聞記事は本当か」と質問した。そこで私が、もし、「その食品成分は体内でこれこれの作用を持つから食べない方がよい」と答えたとしよう（実際にはそうは答えなかったのであるが…）。卒業生にとって、これはまさに「権威者」の言葉である。絶対にうのみにしてほしくない。私に対して、「それでは証拠を示せ」ぐらいのことは言ってほしい。

そこで登場するのは図書館である。私は、教員として、図書館でどのようにして証拠を探したらよいかを教え、図書館員は、どのような道筋をたどって証拠にたどり着けるか、相談にのることになる。それが大学の教育であり、サービスである。この場合に重要なことは証拠の質だ。「権威者の言葉」、言いかえれば「えらい人がこう言ったから…」は証拠とはいえない。このような問題については無作為化比較試験が最も質の高い証拠を得る方法のひとつであろう。ウェブ上には、食品成分の名称をキーワードとし、検索の対象を「ヒト」についての「無作為化比較試験」に限定することによって、容易に必要な原著論文の検索を行うことの出来るデータベースが、無料で一般に公開されている。また、必要な論文が本学の図書館で入手できない場合に、その所在を確かめ、その論文を他から入手する図書館のサービスの質の充実・向上は近年著しい。速ければ依頼した翌日には文献を手にすることができる。場合によっては海外の図書館から取り寄せることも可能である。論文を入手したら、その論文を読んで、主体性を持って判断すればよい。

私は任期中、「権威におもねることなく、真実を追求することをめざす」という、あるべき大学教育の姿を推進するために、図書館が行わなければならないサービスのさらなる充実に力を傾けたい。

（附属図書館長）

第五十二号 目次

図書館長に就任して 伊東 蘆一
未来ロボットの活躍の場は家庭と戦場？ 市原 信
大江文庫資料 茶室起こし絵図 溝口 明則
本の周辺 「歩けば、風の色」 渡来れい子
今と昔 「リサイクル」 辰野 早紀
学生スタッフの一員として 岡田絵美子
図書館利用ガイダンスについて 金澤 良枝
文献・情報の選択と未来
本学教員寄贈著書紹介 上村 協子
松平友子先生の遺産
資料の紹介 「国宝 高松塚古墳壁画」 三宅 裕

未来ロボットの活躍の場は家庭と戦場？

市原　信

このところ連続して家庭用ロボットに関する論文を大学研究紀要に投稿している。なぜこのようなテーマを選んだか？一つには、卒業研究のテーマで「人間とロボットの関係を知りたい」「ロボットとの共生について実験したい」などの声を受け、２０００年から心理学の視点から家庭用ロボットの実験を開始したことがある。

筆者の専門分野は、研究手法としては「生理心理学」、研究テーマとしては「睡眠のリズム」「リハビリテーション訓練」「コンピュータユーザビリティ」そして最近は「船舶のヒューマンエラー」の領域にも現場調査という形で関わっている。実はこれらのテーマはロボットやコンピュータと密接に関連している。

１９９９年にソニーが発売した「ペットロボット」ＡＩＢＯは、ロボットのイメージそのものを直接的に表現した全く新しいカテゴリーの家庭用製品であった。筆者らはＡＩＢＯを使った一連のコミュニケーション実験を現在行っている。ロボットというと「男性向け」というイメージがあるかもしれないが、一連の調査と実験からわかったことは、女性にとってもきわめて魅力的なアイテムだ。またこのての商品は「子ども向けおもちゃ」や「一部マニア向け商品」との受け止め方があるが、これまでの実証実験の結果から、ＡＩＢＯは児童の「ペット」から高齢者の「頭のリハビリ」に至るまで、幅広い実用性のあるロボットであることが明らかとなった。最新のＡＩＢＯには「留守番」などセキュリティ機能も付加されている。

ロボット関係の文献やネット情報を検索して感じたことだが、アメリカという国の不思議さである。平和と戦争がまさに同居している。社会的弱者への支援にアメリカは熱心である。障害者と健常者の共生インフラであるバリアフリーを提案したのはアメリカである。一方では、イラク戦争に象徴されるごとく、ハイテク・ロボット兵器を駆使する「戦闘国家」でもある。

その不思議さを象徴するのが米iRobot社である。この社は１９９０年にベンチャー企業としてMIT（マサチューセッツ工科大学）の研究者らが立ち上げたが、家庭用掃除ロボット「ルンバRoomba」（２００５年までに１２０万台以上の販売実績があるという）を世に送り出すと同時に、米国防総省の支援を受け「PackBot」などの戦場ロボット開発でも知られている。このロボットはアフガニスタンとイラクの戦争で２００台以上が実戦稼働しているという。家庭と戦場、この両極端フィールドが一つの企業内ポリシーとして矛盾無く両立しているのであろうか。同社に言わせると「きつい、汚い、危険」の３Ｋ仕事を担うロボットを開発しているそうだ。「経済合理主義」の視点からは矛盾がないのであろう。

実は生活環境の中におびただしい数のロボットがすでに進出している。たとえば「全自動洗濯機」で、キー入力や作業が完了した時に音声でステータスを告げられた時「アレッ」感じることがあるが、それは内装されたロボットと我々が接触する瞬間である。ロボットと関連してユビキタスと言う言葉を最近よく聞く。これは「いつでもどこでも」の意味であるが、ケータイ電話はまさにその典型である。その中身はネットワークにつながったロボットである。このように我々の生活環境に「目に見えないロボット」はすでに遍在しているのである。

アメリカのロボット開発は軍事研究という側面が強くある。たとえば２０１４年始動を目標に約１６兆円を投じ「未来戦闘システムFuture Combat Systems（FCS）」を構築するという。ユビキタス技術と連動したネットワーク上で、ロボットが戦闘を主導する。そうなれば古典的な戦争の概念が覆るであろう。

筆者はロボットの実験に関わるようになったのがきっかけで、日本のロボット開発の最先端を走る早大理工学部の機械工学研究室と交流するようになった。特にヒューマノイドロボットの研究で世界的に知られるラボであるが、ここのスタッフはロボット開発のポリシーにこだわりを持っているように感じる。テーマは、「２足歩行ロボット」を基本に、車いすの機能を持つ「２足ロコモータロボット」、「フルート演奏ロボット」、「発語ロボット」、「情動表出ロボット」、「医療支援ロボット」、「生物共存型ロボット」、「咀嚼や口腔機能ロボット」など生活や医療・福祉フィールドを意識した研究を精力的に行っている。

個人的には、工学的発想と心理学的な発想の違いに興味がある。前者は製作・生産の視点から、後者は使用者の立場にこだわるクセがある。両者のコラボレーションを目指して今後とも情報交換をしたいと考えている。

経済産業省によると、ロボットの２００５年国内市場は５千億円だが２０年後には６兆２千億円が見込まれるという。ロボットの活躍が期待される分野は幅広い。産業用分野で日本は世界のトップを走り続けている。家庭用分野は今まさに黎明期である。医療や福祉分野も極めて有望だ。そして軍事分野はもっとも気がかりなところである。

最後にＳＦ作家アイザック・アシモフが提案したロボット三原則を確認しておきたい。ロボットは「人間に危害を加えてはならない」、「人間の命令に従わなければならない」、「自己を守らなければならない」。これは時代と空間を越えて人間とロボットが共生するための必要最低条件であると思うからである。

（家政学部教授）

研究室の留守番をするＡＩＢＯ

大江文庫紹介

茶室起こし絵図

溝口明則

大江文庫所蔵の「起こし絵図」のコレクションは、全部で三四点ある。内分けは「小堀遠州・四畳半板入」、「山田宗偏・三畳舗」など草庵茶室二六点、「（片桐）石州・腰掛待合」など待合三点、「（川上）不白・下腹雪隠」など雪隠二点、「山田宗偏・猿戸」など戸二点、「石州・萱門」一点である。草庵茶室を中心にその周辺の施設を集めたもので、いずれもよく知られた茶人の作品を対象にしたものである。猿戸など特例を除き、略同一の縮尺で作られており、セットとして構成されている。

「起こし絵図」は他に類例のない奇妙なものである。まず、すべて和紙で作られている。台紙の中央に平面を表す線描画を布置し、その四周に壁面を貼り付けている。壁面を立ち上げれば、模型のように立体に組み立てることができる。通例、天井と屋根はない。室内を上から覗くためである。各面は版木で刷られた線画が描かれるが、とくに四周の壁面は、それぞれの和紙の表裏に、外壁と室内の造作が描かれている。しかし各部に書き込まれた部材寸法などをみれば、これを模型とみることは難しい。線画はたしかに図面であり、これは指図の一種である。

通例「起こし絵図」は、四周の壁面を立ち上げるだけでなく、床（とこ）を中心とした造作、中柱と小壁、違棚（ちがいだな）など細部も立ち上がるよう精緻に作られている。立ち上げた各部は簡単なジョイントで繋ぐことで立体として安定する。ジョイントに付された朱色の同じ番号同士を繋ぐのだが、この番号は、組み立て手順も示している。立ち上げた各部を手順通りに畳み、最後に台紙を畳むと、封書のようにコンパクトにまとまる。限られた大きさの中で巧妙に折り畳めるよう作られているが、手順を間違えるとうまく収まらない。ペーパークラフトとしても興味深い工夫である。

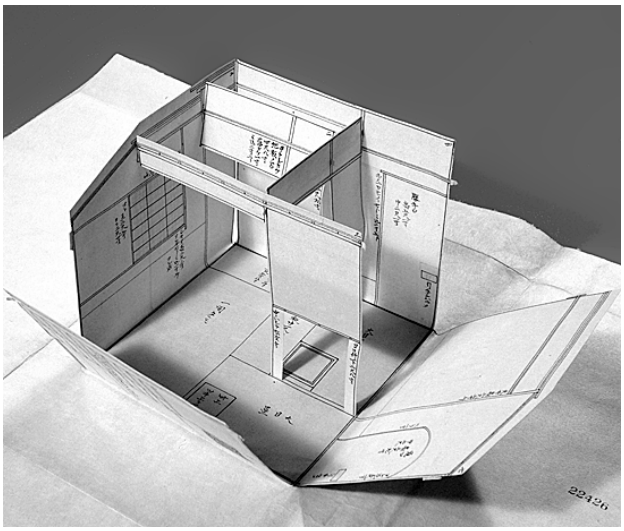


図２：利休・三畳舗板入（立ち上げた状態）

「起こし絵図」は草庵茶室とその周囲の施設を対象としたもの以外は見あたらない。この理由はいくつか考えられる。

まず、狭小な草庵茶室の空間は、通常の二次元の図面だけではうまく表現できない、という対象の特徴である。これは本来「タメシ」であったであろうが、量産されたものであるから、建築を作るための図面ではなく、すでに作られた名席を表したものであるから建築職人のためのものではない。江戸後期頃の茶匠たち、二次元の図面から立体をうまく読みとれない人たちのために作られたものである。

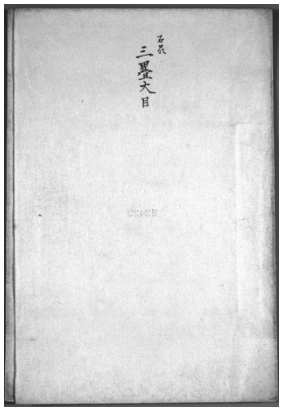


図１：石州・三畳大目（畳んだ状態）

第二に、模型のように、構成部材それぞれに厚みがあれば問題はおきないが、厚みを持たない和紙を立ち上げれば、立体として各所に矛盾が起きるはずである。しかし「起こし絵図」は、巧みにこの矛盾を回避しているようにみえる。矛盾が回避できる原因は、起こし絵図の工夫だけで実現できているのではなく、草庵茶室を含む数寄屋建築が、畳の規格寸法に支配された「畳割制」に従っているためで、室内の内法寸法を忠実に守りさえすれば精度が保たれるためである。「起こし絵図」の発想は「畳割制」に多くを負っており、立体としながらも矛盾を持たない図面、という発想を容易に実現しているのである。

大江文庫所蔵の「起こし絵図」は名席を集めたセットで、すでに失われた茶室も含まれている。専用の箱が付属していたとも予想されるが、大江文庫のコレクションは箱を持たない。今後、各地に残る「起こし絵図」のセットと比較研究を進めることで、このコレクションの出自が判明するであろう。このためにはまず、大江文庫コレクションの詳細なリストを作ることが必要だが、工芸文化学科4年生の木暮絵里子さんは、本年度の卒業研究で「起こし絵図」について研究を進め、一夏をかけて大江文庫コレクションの写真撮影と実測作業を行い、詳細な目録（すでに図書館所蔵）を作成した。この間、本学図書館にさまざまな便宜を図っていただいた。今後この目録を手がかりに、多様な研究が拡がりそうである。

（人文学部助教授）

本の周辺

歩けば、風の色

風と遊び風に学ぶ2

（辰濃和男著・朝日ソノラマ）

渡来　れい子

元「天声人語」の筆者のエッセイ『歩けば、風の色』を読んでの私の受けた感想として、先ず第一にその文章の美しさ、優しさ、暖かさに感銘を受けた。また読後ほっとした穏やかな気分にひたることが出来た。

あまりにも先を急ぎ心のゆとりもなくただ〳〵いたずらに走り続けている日々、風の音にも耳をかたむけることなく、そしてまた野原に咲く花の美しさにも心をゆだねることのないほんとうに味気ない時をのみ追いかけている現代の営みをただ寂しく感じるのである。もっと世の流れに従順に自然とのふれあいを大切に楽しむ寛大な心にはなれぬものであろうか。今の世の中が悪いとは決して思いたくはないけれど何とか心のゆとりを持ち、季節のうつろいを大切に静かに自分なりのものにして与えられた命を大切に生きてゆけたらとひし〳〵思うのである。清々しいさわやかな思いで自然の素晴らしさをからだ全体に受けとめることの出来る人間になりたいと思うし、またなれたらと心に言い聞かせているのであるが。

人間らしい暖かい情愛も希薄になり一人よがりなことのみが横行している今の世の中を本当に悲しく思うばかりであるが、この本を読み救われた思いであった。若い人は勿論、大人と呼ばれる人でさえ余りにも言葉が乱れ、正しい日本語の美しさは影をひそめてしまっているような思いを痛切に感じている現代をただ〳〵なげかわしく思うのは私ばかりであろうか。自然を愛しこの世に生を受けた時のけがれなき心を大切に誠実にはぐくんで生きたいと思う。美しい心で物を見、素直な心で物事を受け入られる心の余裕を持ちたいとひし〳〵思ったことである。そして人間の智恵と一人一人の心の持ちようによって殺伐としたこの社会ももっと住み良く心楽しい場になるのではないかと考えさせられた。

風が吹く、枯れ葉が道にころがる音が聞こえてくると記されたその言葉を心より感銘深く思い、このような現世だからこそ大切に大切にわが心の中にも常に持ちながら日々を過ごせたらと願っている。

本書は数年前に出会ったものではあるが、今では私にとって心の糧になる大切な一冊である。

（家政学部助手）

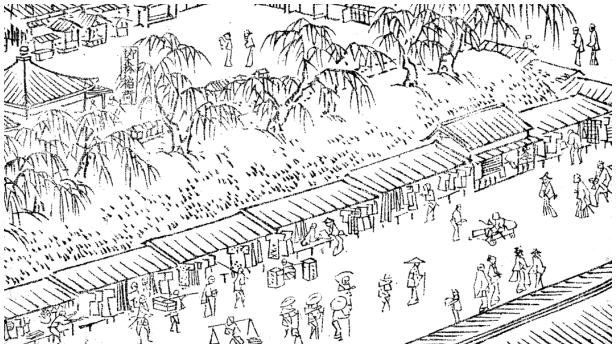
今と昔

―リサイクル―

現代は物があふれ、使い捨ての時代といわれている。生活のすべてを太陽エネルギーの供給でまかなっていた江戸時代はどうだったのだろうか。

物作りはほとんど人の手によって行なわれ、大量生産が難しかった。それでも様々な物が流通していたという。食物、着物、燃料など衣食住の必需品はほとんど植物製だった、資源に見合った消費が自然と調和のとれた形で築かれていた。モノを修理、修繕する業者、また現在のリサクルショップのような「献残屋（けんざんや）」（江戸時代、献残の払下げをうけ、他の献上者に売る商人）と言う業者があった。江戸の町は武家人口を含め百万の大都市と言われ、参勤交代の際には全国から土産物が江戸に集まった。

衣料の着物を例にとると、新しくあつらえる場合、絹ものは「呉服店」で、木綿は「呉服太物（ふともの）店」で反物を買い仕立てる。それなりにお金がかかる。新調された着物もやがて古くなると古着屋に出され店頭に並ぶ。江戸名所図会の中の柳原堤の図には数多くの古着屋が軒を並べている。江戸庶民に安い衣料を供給していたことが想像できる。しかし一方では大切な着物を孫子の代まで着続けるために、解いては伸子張りや洗い張りをして使い回す。更に古くなると使える部分で子ども用に、布団の皮や端切れにする。ゆかたは古くなるとねまきにし、更に古くなるとおむつにし、傷んでくると雑巾にするのが一般家庭の常識だった。最後は燃やして灰になったら洗濯や肥料にする。驚くほどモノを徹底的に利用するゴミにしない社会のシステムがあったと云える。



柳原堤（部分）　店先に吊り下がったキモノ

学生スタッフの一員として

辰野　早紀

図書館で学生スタッフとして働きだしたのは、入学して間もない５月頃。友人と学内の施設を見て回っていた時に、たまたまスタッフ募集の張り紙を見て応募したのがきっかけであった。

学生スタッフとして働いて、様々なことを学んだ。特に図書の配架場所を大まかではあるが覚えられたのは、個人的に非常に役に立った。覚えていたため、レポートを書く際には、だいたいの図書は図書検索機を使用せずに探し出すことができ、また、時には友人の分も探し出したりした。

飽きっぽい私が、大学一年生から現在まで学生スタッフとして続けられたのは、周りの人々に恵まれていたからだ。普段の学生生活では、他学部、他学科との交流がなかったので、学生スタッフとして働くことにより、多くの人々と知り合うことができ、交友関係が広がった。また、同じ学生スタッフはもちろんのこと、図書館職員の方々にはとても良くしてもらった。勤務時間中は、仕事内容を丁寧に教えてもらい、授業の合間に図書館へ行けばちょっとした世間話と、他の学生とは一味違った生活を送った。図書館での学生スタッフを経験して、とても充実した学生生活が送れたと実感している。

（家政学部４年）

岡田　絵美子

私は、大学２年生のときから４年生までの３年間、大学図書館でのアルバイトを経験させていただきました。きっかけは、図書館が好きだから、司書の仕事に興味があるから等というものでした。

このアルバイトを始めて、よかったと思うことがたくさんあります。まず、どの分野の本がどこにあるのか、すぐに目的の本を見つけられるようになったことです。そして、今まで以上に本を読むようになりました。また、カウンターでの利用者とのやり取りの中で友達の輪も広がっていきました。

最後に、学生スタッフということなので、ある時はスタッフとして、またあるときは利用者として図書館を利用しています。利用者にとって気持ちの良い図書館はどのようなものかを考える自分がいます。だから、カウンターにいるときは、利用者の立場にいるときの気持ちを念頭においておくことも大切だと思いました。

（家政学部４年）

図書館から

図書館利用ガイダンスについて

近年、学術情報メディアの電子化とネットワーク環境の進展はめざましく、大学図書館にとって情報アクセス環境の整備と並んで、利用者自らがパソコンを使いこなしてネットワーク上の様々な情報を収集し活用する技術（情報リテラシー）の教育が大変重要になっています。

附属図書館では独自に図書館ガイダンスを企画し、実施しています。４月には新入生を対象とした「図書館オリエンテーション」を行っています。時間にして30分程度で、内容は図書館の提供するサービスの案内と図書館施設紹介に留めています。ここでは、図書館に対して関心を持ってもらうことを狙っています。

もう一つが３・４年生を対象とした「図書館ガイダンス」で、前期の５月から７月と後期の10月から12月にガイダンスを希望する教員の授業の１コマを使って行っています。

これはレポートや論文を作成する上で役立つ文献探索のための基礎的な知識を身に付けてもらう為のものです。内容はレポート・卒業論文を書くための情報収集方法（どのデータベースを使えば必要な情報が得られるのか）や文献複写等のレファレンスサービスの利用方法を説明しています。

平成17年度は全部で23回のガイダンスを実施し、合計２２７名の学生がガイダンスを受けました。ガイダンスの最後にはアンケートを取り、ガイダンスのレベルアップに努めていますが、このアンケートの自由記述の所に書かれている感想で多かったのが、「もっと早い時期に受けていれば情報収集が楽だった」「１年生の時に受けていれば良いレポートが書けた」といったものでした。

このような声を受けて、期間の制約を無くし、学年を問わず学生が授業の合間に、15分位の時間で必要な部分だけを聞くことができるような短いガイダンスを用意しました。１・２年生ではまだ必要性が分からないのか申込は予想を下回っていました。次回の実施の際には、もっと学生の興味を引くような広報を行うとともに、ガイダンスの更なる充実を行なっていきますので、先生方も協力をお願いします。

文献・情報の選択と未来

金　澤　良　枝

ここ数年、文献は図書館に足を運ばなくてもネット検索、電子ジャーナル化により簡単に入手できるようになった。文献について思うことを述べてみたい。

・情報の多さ

私の専門である臨床栄養学に関する分野においても、情報や文献の多さは凄まじいものがある。雑誌類も沢山あり目を通している内に次号が発刊され、同類の雑誌が多すぎるのではないかと思うこともある。著者それぞれ考え方、表現法など個性があり面白いが、その中で情報の内容を考え選択するには、自分の器量が問われるような気がする。

・古い文献を読み返すと

古い文献を整理していくと、時の流れを感じる。たまって行く「紙」に目を通すと、つい時間を忘れ読んでしまうこともある。学問の進歩、時代の流行、そしてこれから何がテーマとなっていくのか、考えながら振り返るのも楽しい。そして、引退された先生の文献に当たると、「今はなにをされているのだろう…」と懐かしさも感じてしまう。また一方、古い文献に今に通じるものを再発見すると素晴らしさを感じる。

・他分野の情報

私の趣味の一つである陸上関係の本や一般雑誌を読むと、食事や栄養管理に関することがテーマとなり述べられていることが多い。トレーニング時やレース時の食事管理など説明されているが、まれに「明らかに、これは違うのではないか」と思われる記載が成されていることがある。自分が栄養学という分野に関わっているから思うことであるが、専門としていない読者が情報として捕らえた場合の怖さを感じることもある。逆に、自分の専門でない分野の情報が、100%正しいとも考えられないことも有り得ると思うと、情報の善し悪しの判断の難しさを感じることもある。

・日進月歩

５年後、１０年後、そして５０年後、栄養学はどのように進歩するのであろうか？　ただ、人は食物を食べ、生体における消化吸収作用ということは、大きく変わらないであろう。何か根本を覆すような、斬新な変化があると面白いと思う。　（生活科学科助教授）

平成17年度本学教員寄贈著書紹介

平成17年度寄贈を受けた本学教員の著書等を紹介します。ご寄贈いただきまして、ありがとうございました。今後も著作物出版の折にはご恵贈いただければ幸いです。

荒木葉子（家政学部）
生活習慣病と食品の機能特性　初教出版　2005

石井孝子（人文学部）
生活文化論ノート　高志書院　2004
女性生殖器疾患患者の看護　医学書院　2003

井上眞弓（人文学部）
狭衣物語の語りと引用　笠間書院　2005

岩井一幸（人文学部）
図解すまいの寸法・計画事典　第２版　彰国社　2004

大橋竜太（家政学部）
イングランド住宅史：伝統の形成とその背景　中央公論美術出版　2005

小口悦子（家政学部）
健康を考えた調理科学実験　アイ・ケイコーポレーション　2005
調理科学実験　第２版　医歯薬出版　2005

片岡二郎（生活科学科・非常勤講師）
大学生･新入社員･主婦のための食品開発ガイドブック　地人書館　2004

金澤良枝（生活科学科）
高血圧を下げるおいしいバランス献立 ：完全版　主婦の友社　2005

酒井治子（家政学部）
高齢者･子ども･新世代が協働で活性化する食育の試み　すこやか食生活協会　2005
保育所における食育のあり方に関する研究報告書　こども未来財団　2004

田村貞雄（人文学部・非常勤講師）
新編日本史をみなおす　地域と文化　青木書店　1996
新編日本史をみなおす　戦争と近代　青木書店　1997

利谷信義（学長）
家族の法　有斐閣　2005
現代法学 第９号（利谷信義教授退会記念号）　東京経済大学現代法学会　2005

西海賢二（人文学部）
地方史研究ほか　論文多数

根本橘夫（家政学部）
傷つくのがこわい　文藝春秋　2005
「満たされない心」の心理学　洋泉社　2003
人と接するのがつらい ：人間関係の自我心理学　文藝春秋　1999
「心配性」の心理学　講談社　1996

緑川哲夫（生活科学科）
現場即応!あたなの疑問にこたえる生徒指導対応事例80　学事出版　2005

松平友子先生の遺産

上　村　協　子

恩師　松平友子先生

「お預かり物があるの」と江原絢子先生が微笑みながら紙袋から出された本を見たとたん、私は凍りついた。松平友子著『高等教育　家事経済教科書　上巻（家事経済）』文光社。昭和９年が初版だが、昭和 17 年再訂第５版のほぼ全ページに、教科書を改訂するための松平先生直筆のメモが、ビッチリと書き込まれていた。松平先生は私の教育・研究指導をしてくださった先生方の先生。私は孫弟子にあたる。お会いしたことは一度もないが、お名前は耳にタコが出来るほど聞いてきた。お茶の水女子大学を退官後、昭和 35 年に東京家政学院短期大学教授、38 年には大学教授となられた。私の先生方は、不肖の弟子である私を戒める言葉に、水戸黄門の印籠のように「松平大先生」の名前を使われた。原稿が締め切りに遅れると「松平先生は締め切りの１ヶ月前には下書きが終わり、１週間前には完全原稿ができていました。」いい加減な仕事をすると「松平先生だったらお許しになりません。」20 歳代・30 歳代の私は間接的に松平先生から叱責され続けた。近年は封印されていた松平先生が、不死鳥のように甦ってきた。向き合うには心の準備が必要だった。江原先生が差し出された３冊の本は、もう一度本棚に納めていただいて、松平先生の人生の軌跡を追ってみることにした。

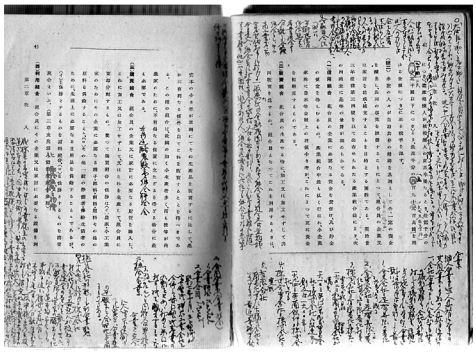
松平先生は、わが国の家政学・家政学部の創設に関わり多大な貢献をした人物である。大正14年には家庭経済領域の代表的な著作、『家事経済学　上巻 654 頁　下巻 504 頁』を文書堂から公刊。原論領域では昭和29年『家政学原論』高陵社書店、昭和43年『松平　家政学原論』光生館を出版し、我が国の「家庭(家族)経済学」「家政学原論」二つの教育研究領域の基盤を築いた。松平先生は「きりっとした紬のお召物に帯をきちっとしめ」て授業にのぞまれ、学生は「滔々と流れるような、又歯切れのよい講義、そして研ぎすましたような論理」に聴きいったという。昭和20年代には「東京女子高等師範学校　家政科主任」「お茶の水女子大学　理家政学部　家政科主任」「日本家政学会　初代　副会長」「日本家政学会会長(第２代)」などの要職を歴任し、終戦直後の日本家政学を陣頭指揮した中心的存在。頭脳明晰、緻密な仕事ぶりに定評があった。だが松平先生の生涯に関する体系だてた先行研究は見当らない。業績を整理するうち表舞台からは見えない難題の積み重なった道を淡々と、自分に厳しく実直に生き抜いた生涯が見えてきた。

大正８年に女性の入学を許さなかった東京帝国大学(現在の東京大学)経済学部で東京女子高等師範学校の依託学生として聴講及び研究を行い、母校の講師となった。

大正10年の職員録には家事主任大江スミの名前とともに松平先生の名前があり、大正11年には講師の採用。だが講師といっても非常勤いわゆるパートである。それ以降は松平先生に延々と非常勤講師が25年近く続く。専任となるのは、戦後昭和21年。松平先生はすでに50歳を超えていた。

昭和22年から25年にかけての道はさらに厳しかった。「家政学がまだ科学として確立しているわけではないから、改組して新設されるべき大学にこれを置くことにすれば、これまでの東京女子高等師範学校がせっかく世間から得てきた学問的評価を、結局、下げることになりかねない」という家政学への蔑視のなかで、家政学部創設のために、松平先生には家政学を学術的に体系化することが要求された。松平先生の答えが家政学原論である。当時の様子を「時間的にも、体力的にも、また精神的にも、ひとりでは担いきれないほどの大きな、そしてきびしい忍耐と努力を要求された役目であった」（松平家政学原論　p.70）と記している。

平成17年10月お茶の水女子大学、創立130周年記念事業公開シンポジウムで話をする機会があった。大江スミが創設した東京家政学院で「松平家政学原論」が書かれ、松平先生以前の家事科主任・林太郎も、東京女子高等師範学校の最後の校長である藤本萬治も、現在の利谷信義学長もお茶大から東京家政学院に来られたと話した。家政学を本当に考え創りだそうとする人はいつも東京家政学院に集まる。



さて話を振り出しにもどそう。江原先生に松平先生の業績を預けられたのは亀高京子先生である。松平先生の家政学原論を引き継ぎ本学の授業を担当され、日本家政学会家政学原論部会の部会長を長く務められた。ご退職時に、江原先生に松平先生の著書を預けられた。なかに書き込みの少ない１冊がある。『家事経済学　上巻』裏表紙には、松平先生の直筆で「父様、母様、正寿様　友子」と書かれている。生涯独身で家政学にかけた松平先生が、人生初めて公刊された著作を家族に贈った現物である。人の生き方を豊かにする家政思想が松平先生の遺産である。江原先生の本棚に眠っていた松平先生の３冊をお預かりしようと覚悟を決めた。

（家政学部助教授）

資料の紹介

文化庁監修

『国宝　高松塚古墳壁画』

（2004年）

三宅　　裕

先日、久しぶりに飛鳥の地を訪れる機会があり、高松塚古墳にも足を運んでみた。目に飛び込んできたものは、進行中の発掘調査を目隠しする巨大な覆屋、あちこちに設置された計器類やパイプの列。ある程度覚悟していたとはいえ、いざその姿を目の当たりにすると、改めて事の重大さを認識しないわけにはいかなくなる。周囲にはのどかな田園風景が広がっているだけに、なおさらその「異様さ」が際立ってしまう。

1972年に色鮮やかな壁画が発見され、マスコミと一体となった考古学ブームの先駆けとなったのが高松塚古墳であった。「飛鳥美人」とも称される女子群像のほかにも、四方の壁には四神像が配され（南壁は破壊されていた）、天井には星宿図と呼ばれる星座も描かれている。当時の風俗や世界観だけでなく、東アジア世界との交流の姿も知ることのできる貴重な資料であり、国宝にも指定されている。

その高松塚古墳が、今大きな転機を迎えている。壁画を保存するために、石室ごと解体することが決まったからである。この決定を後押しする契機となったのが、ここで紹介する文化庁監修『国宝　高松塚古墳壁画』である。発見から30年経たのを機に、最新鋭の装置・最先端の技術によって壁画の現状を記録し、新たな分析結果と併せて公開する。これが、本書の本来の目的であった。実際、大判で鮮明な画像の数々は、壁画の素晴らしさを何よりも雄弁に語ってくれている。しかし、皮肉にもこれが壁画の褪色やカビのひどさを白日の下にさらす結果となった。そしてそれは、これまでの保存策が、完全なる誤りであったことも同時に意味していた。

従来の戦略は、「現状維持」の名の下に、基本的に「何もしない」というものであった。少なくとも壁画保存のために積極的な方策はとられてこなかった。石室の内部は湿度100%に近い異常な環境であるにもかかわらず、そのまま放置され、侵入してくる雨水や虫に対しても、何ら有効な手が打たれることはなかった。前例のない発見で、対応に苦慮したことは理解できるにしても、「現状維持＝保存」とは必ずしもならないことは、今回の結果がよく示してくれている。

石室の解体については、まだ異論も多いようだが、個人的には正しい決断だったと思っている。ただ、慎重になるあまり、決断が大きく遅れてしまったことは悔やまれる。肝心の壁画を失ってしまえば、何のための文化財保護なのか分からなくなってしまう。大局を見失っていたとの謗りは免れないだろう。

石室自体も傷みが激しく、解体作業には大きな困難が予想されている。高松塚古墳の壁画が、本の中だけの存在となってしまわないよう、作業の成功を祈るばかりである。現行の文化財保護法は、昭和24年に法隆寺金堂の壁画が火災で消失してしまったことを契機に制定されたものである。どちらも国宝に指定された壁画である点は、皮肉な偶然としか言いようがない。この国では、国宝を犠牲にしないと文化財保護が進まないのだとすれば、それはあまりにも悲しいことである。

（人文学部助教授）